

## 近代広東における先天道の興隆と東南アジア地域への展開 ——潮州からタイへの伝播と適応を中心に——

志賀 市子

### はじめに

本稿は華人宗教の東南アジア地域への伝播と適応について、中国の民間宗教教派の一つである「先天道」（または「先天大道」）の分派の一つ、嶺南道脈（または嶺南先天道、先天道嶺南道派）を事例として論じるものである。

先天道とは、清代雍正年間江西に創始された無為金丹道（別名青蓮教）の分派であり、その源流は明代に成立した羅教（無為教）に遡る。青蓮教は、道光年間に清朝による二度の大弾圧を受けて分裂し、その後教徒は各地に潜伏して活動を続け、先天道、一貫道、同善社、帰根門など、多くの分派に分かれた。嶺南道脈は、分裂後に台頭した五人の教祖「先天五老」の一人、水祖（彭依法、別号儒童老人）の道脈に連なる教徒が、咸豐十年（一八六〇）、湖北から広東省北部の清遠県に入り、布教を行ったことに始まる〔志賀二〇〇二・二四〕。

十九世紀後半の広東地域には、既存の道観に所属する出家道士や道教儀礼を生業とする職業道士とは別に、郷紳・豪商・教師、医師といった在俗の地域エリート層を中心として、道堂、善堂、齋堂、仙館（仙観）などと呼ばれる新興の道教系宗教慈善結社を設立する動きが起

こっていた。こうした宗教結社は、道教を中心とした儒仏道三教が融合した思想を背景として、座禪、瞑想、喫齋などの自己修養と贈医施薬、施棺助葬などの他者救済を実践した。先天道系の道堂や善堂もその一つであった〔志賀一九九九〕。

先天道は十九世紀半ばに広東に入ってから、数十年の間に急激な勢いで広東省全域に広がった。また広東から海外への移民の増加に伴い、香港、マカオ、東南アジア地域にも教勢を拡大した。海外に拡大した先天道は、ホスト社会の文化や社会制度に適応しつつ、中国本土の祖堂との関係を維持していた。

本稿では、近代広東道教の興隆と東南アジア地域への展開、また華人宗教の東南アジアへの伝播と適応といった問題について考える一つの手がかりとして、先天道嶺南道脈をとりあげたい。中国民間宗教教派の東南アジア地域への展開に関する主な先行研究としては、マージョリー・トブレイン氏のマレーシア、シンガポールにおける先天道の齋堂研究や、野口鐵郎氏の真空教と徳教に関する研究、さらに吉原和男氏の徳教に関する一連の研究がある〔Topley 1963, 1978; 野口一九八三、吉原二〇〇五〕。これらの先行研究を踏まえた上で、華人宗教の海外展開の事例として先天道をとりあげる研究意義及び研究課題をい

くつか挙げてみたい。

①先天道は、帰根門や普度門など嶺南先天道以外の別の分派も含めると、その勢力は極めて広範な地域に及んだ。また、早くは光緒年間にタイやマレーシアへ伝播し、民国期から戦後にかけても、新しく移民した信徒たちによって新たな道堂や斎堂の設立が見られるなど、長期にわたって海外進出が行われている。その流れを、地域や時期別にたどっていくことによって、それぞれの地域、時代ごとの海外進出の過程や背景を比較分析していくことが可能である。

②海外への進出・拡大という観点から見た場合、先天道は中国人移民のいったいどのようなネットワークを通して広がったのだろうか。戦後潮州系の商人ネットワークを通じてタイやマレーシアに広がった徳教や、台湾人ビジネスマンの進出とともに近年著しい拡大を示す一貫道などは、どのような共通点、相違点があるのだろうか。先天道の場合、男性信徒を中心とした公的なネットワークだけでなく、女性信徒の私的なネットワークも注目される。先天道は女性の入道者が多く、末端の斎堂の中には、女性たちのみで運営されるところも少なくなかった。海外華人社会における斎堂の設立と発展には、「斎姑」と呼ばれる女性信徒たちの師弟関係や義姉妹関係、あるいは養母―養女関係といったプライベートなつながりが大きな役割を果たしていると考えられる。

③先天道は東南アジア各地に伝播した後、受け入れ側であるホスト社会の政治体制や文化・宗教政策に適応していった。先天道は喫斎や禁欲主義を旨としていたものの、決して特殊な信仰を持った信者の孤立したコミュニティであつたわけではなく、華僑社会においてさまざまな社会的機能を果たしていた。また、会館や宗親会、仏教団体や孔教会など、他の華人系のボランティア・アソシエーションとも密接な関

係を持ち、一定の社会的地位を得ていた。先天道の結社のそれぞれの地域での発展過程を比較分析することは、海外華人社会における華人宗教の役割やホスト社会への適応を考察する糸口になりうると考える。

東南アジア地域における先天道の歴史と現状に関する筆者の調査・研究は、まだ予備的なものに過ぎず、したがって、以上挙げたすべての課題をここで論じることは不可能である。そのため本稿では、先天道嶺南道脈の広東省における展開とその宗教結社としての特色、また東南アジア地域への展開過程を概観した上で、とくに潮州・汕頭地域からタイへの伝播と適応についてとりあげることにした。

## 一、広東における先天道嶺南道脈の展開

### (一) 先天道の広東への伝播と拡大

咸豐十年（一八六〇）のある日、湖北からやってきた一人の先天道教徒が、清遠県上廓で「遠安堂」という屋号の薬屋を営んでいた林法善のもとを訪れた。教徒の名前は陳復始といい、鄂区十地の艾運春より、嶺南地域開化（布教）の命を帯びていた。

陳復始と林法善の出会いについては、詳しいエピソードが後の信徒によって伝えられている。それによれば、林法善は儒に通じ、医徳の誉れ高い人物で、薬舗内に「五行飛鸞乩壇」を開設していた。ある日、三田祖師という唐代の神仙が乩壇に降り、「裸足の仙人が雨の中を訪ねてくるので、師として懇ろに拝し、正道を修めよ」との乩示を伝え、林法善がこの乩文を心に刻み、その日を待ちわびていたところ、なんと本当に雨の中を、跣足で右手に毛筆、左手に善書を持った老人が訪ねてきたのである。この老人がすなわち陳復始であつた。この人こそ乩示の仙人に間違いないと確信した林は、陳を師として奉じ、や

が先天道に帰依した。陳が遠安堂に駐留して道を講じたところ、城郷の紳士や近隣の村人たちの間で評判となり、弟子となる者が日ごとに増えていった。<sup>3</sup>同治九年（一八七〇）、林法善は弟子たちの協力を得て、神仙の乩示に従い、清遠県の禺峽に廬舎を建て、藏霞古洞と名づけた。<sup>4</sup>

先天道の大本である青蓮教の教義は、無生老母信仰、弥勒下生信仰と三期三仏説を基本とするものであり、末劫の世を救うため弥勒仏が下生して衆生を救済し、無生老母のもとへ帰すという救済論を説く。信徒は日常的な修行として、喫斎や「坐功運氣」と呼ばれる内丹修養を実践し、禁欲主義を貫いた。また青蓮教は会党や武力組織と結びついて、「斎匪」と呼ばれる秘密結社集団を形成し、王朝権力に対抗する民衆反乱を引き起こしたことも知られる『浅井二〇〇五・四四―四五』。

一方広東省に拡がった嶺南道脈は、青蓮教の教義や修行の伝統を継承していたものの、それを排他的、狂信的に実践したわけではなく、むしろ日常的な倫理道德を説き、善拳の実践を奨励する善堂的な性格が強かった。信徒たちも、宗教反乱の首謀者としての「斎匪」研究で強調されるようなアウトロー的性格は希薄であり、地方の名士や富裕な商人、医師、教師といった知識人を主とした。各地に散らばった先天道の堂社と地方政府や地主階層との関係はおおむね良好であり、後述するように、民国期の地方官僚の中には、進んで先天道に入道する者もいた。

清遠県の藏霞古洞から分枝した嶺南道脈は広東全域に拡大した。藏霞古洞の林法善やその弟子たちのもとに集った八人の主要な弟子たちはそれぞれ堂名（化賢堂、育賢堂、敬賢堂、愛賢堂、習賢堂、礼賢堂、戴賢堂、錦賢堂）を授けられ、清遠県や花県、惠州などに散らばり、

新しい堂を開設した。その中でもとくに有力な存在であったのが、育賢堂の陳昌賢と礼賢堂の巫済良である。

陳昌賢は花県の人で、林法善の弟子李道榮（道号淨泉、別号象嬰老人）を師として入道し、広東省東部の惠州、潮州、嘉應州の布教活動を任された。その後、弟子たちの支持を得て、紫金県（旧名永安県）の紫霞山に「紫霞洞」を設立した。紫霞洞は、別名「三州堂」とも呼ばれ、惠州、潮州、嘉應州に分布する先天道系道堂を統括する総堂としての役割を担っていた。<sup>5</sup>

一方礼賢堂の創始者であり、医師でもあった巫済良のもとにも多くの有力な弟子が集まり、清遠、仏山、東莞、深圳、香港などに新しい先天道の堂を設立していった。後述する清遠飛霞洞の創始者麥長天もその一人である。

陳復始のエピソードにもあるように、先天道の布教はしばしば、幹部信徒が既存の道堂、善堂、乩壇へ出向いて教えを説くという形をとった。先天道の救済思想は、それまで高次宗教の教義に接したことのない人々にとって、新鮮かつ魅力的なものに感じられたのである。呂祖を祖師として奉じる道堂の信徒や潮州の地方神である大峰祖師を奉じる善堂の信者たちの中にも、先天道に帰依する者は少なくなかった。先天道は、地域の既存の廟や仏寺、善堂や乩壇と共存し、また既存の民間信仰には物足りない信者を取り込む形で、広東の地方社会に急速に浸透していった。

## （二）先天道の位階制度

先天道には、入道者の修行の段階や期間に応じて位階制度が定められていた（表1）。最も高い位である「十地」は、複数の省や国から成る教区、すなわち「二地」を束ねる指導者であり、「教主」または「家長」と呼ばれた。「十地」の位につくことができるのは男性のみで

表1 先天道内部の位階制度

階級	字輩	呼称		職掌、教区、職名など
		男性	女性	
十地	道字輩	太爺		一つの区（数省＝一区）を管轄する。家長、教主
頂航	運字輩	老師		一つの省を管轄する
保恩	永字輩	太老先生	姑太	女性の最高位
引恩	昌字輩	老先生	姑婆	
証恩	明字輩	大先生	大姑	
天恩		先生	姑娘	
護道				
衆生				

「十地」の管轄区域は以下の十区に分けられる。

「浙江・福建」、「四川・陝西、甘肅」、「江南」、「江西・安徽」、「広西・広東」、「雲南・貴州」、「河南・直隸」、「湖北」、「山東、山西」、「湖南」。

あり、「十地」に選ばれた信徒は「道」の字を含む道号を授けられ、「太爺」という尊称で呼ばれた。「十地」の下には、「頂航」、「保恩」、「引恩」、「証恩」、「天恩」と分かれ、さらにその下は一般信徒を指す「護道」と「衆生」に分かれていた。入道後、戒律を守り、齋食を堅持し、座禪や誦経にも熱心な信徒であれば、昇格のための試験を受けることが許された。試験の結果、修行が一定の段階に達したと認められれば、発恩師、引進師、保拳師と呼ばれる三人の師父の推薦を得て、「天恩」の位を授けられる。「天恩」以上になると、自ら弟子をとることができ、「引恩」以上になると、自分で堂社を開くことができる。女

性が到達できる最高位は「保恩」までで、この位に達した女性信徒は「姑太」という尊称で呼ばれた。師が弟子に位を授けることを「発恩」といい、この「発恩」を行うことができる権限は、高い位を持つ少数の信徒に限られていた。<sup>⑥</sup>

先天道の信徒たちが、しばしば県や省を越えて、相互に緊密なネットワークを形成していた理由の一つはまさにこの点にある。信徒が高い位に昇格するには、より高い位を持つ師父のところへ行って導いてもらうか、または高い位の師父を招き、発恩の儀礼を執り行ってもらった必要があった。一つの教区が複数の省に跨り、しかも高い位を持つ信徒の数は限られていたので、信徒たちは省を越えて行き来しなければならなかった。そのようにして形成されたネットワークは、堂と堂の組織的な関係というよりも、師父とその弟子という師弟関係を媒介としたものであった。

### (三) 先天道の信徒たち

先天道に入道した信徒たちの性別、年齢、職業、階層はさまざまであったが、女性が多く入道したところに特徴がある。彼女たちのほとんどは、未婚、離婚、死別といった理由によって单身となった女性たちであり、中でも、「自梳女」と呼ばれる、結婚を拒否し、独身を誓って「梳起」という儀式を行った女性たちが多数含まれていたことは、既に多くの研究で明らかにされている [Topley1975; Sankar1978; Stockard1989; 曹一九九四]。

筆者はこの問題について、次のように論じたことがある [志賀二〇〇二・三〇―三四]。先天道に自梳女が多く入道したことは確かだが、先天道を自らの意思で結婚拒否した女性たちの秘密結社であるかのようにとらえるのは問題がある。というのは、先天道に入道したのは自梳女とは限らず、夫と死別した寡婦や離婚した單身女性、老後の面倒



を見てくれる家族を持たない女性たちもいた。彼女たちはさまざまな事情によって単身生活を余儀なくされた女性たちであった。また、齋堂は先天道独特の結社形態であったわけではなく、華南の伝統社会では普遍的に見られたものだった。伝統的な齋堂は、尼姑たちが暮らす庵堂や出家した僧侶と在家信者によって営まれる私的な寺といった仏教的色彩の強いものだったが、先天道の齋堂は在俗の信徒たちだけで営まれた〔Sankar: 248〕。

筆者は先天道が女性を引き付けた理由として、主に二つの理由を挙げる。一つには先天道が観音や瑤池金母などの女性神の信仰を中心に据え、宝巻や善書を通して女性の救済や修道を積極的に説く教派であったという点である。

第二に、先述したように、先天道では女性たちも宗教的に高い位につくことができ、経済力のある女性が堂主となつて「齋堂」を運営する道が開かれていた。「齋堂」とは、神々を祀る宗教施設であると同時に、扶養してくれる家族を持たない単身女性の「生養死葬」、すなわち老後の扶養から、死の看取り、埋葬、そして死後の供養まで保証してくれる場であった。香港やシンガポールなどでは、「阿媽」と呼ばれる住み込みの家政婦をしていた「自梳女」たちが、引退後仲間を募り、集合住宅の一部を購入して齋堂とし、ともに老後を過ごすケースも見られた。また多くの齋堂では、捨てられたり、親を亡くしたりした女兒を養女として育てており、彼女たちが成人後も齋堂に残り、後継者となつていくこともあった。

先天道は、社会的弱者のための一種のアジールとして機能してきたこの齋堂という形態を積極的に導入することによって、多くの女性信徒を獲得することに成功したと言えよう。とりわけ齋堂は故郷を離れ、単身外国に渡った女性たちのよりどころとなつた。「自梳女」を含

めた多くの単身女性とその経済力、それを吸収する齋堂というシステム、さらに女性たちの移動という条件が結びつくことによって、先天道の末端組織の広範かつ急速な拡大は可能となつたのである。

#### (四) 清遠飛霞洞の活動・事業

清末から民国期にかけて、広東に設立された先天道嶺南道脈の堂社の中でも、建物の規模、収容人数において突出していたのが、清遠県の名勝飛來峽（別名峽山、禺峽）に設立された飛霞洞仙館である。飛來峽は千五百年近い歴史を持つ飛來寺を擁し、また道教の第十九福地にも数えられる仏道二教の聖地である。三水県人の麥長天（道号昌泰）の提唱により、一九一一年から二十年近い歳月をかけて建設された飛霞洞仙館は、山の斜面に沿って建てられた六層の広大な石造建築で、内部には祭祀空間、厨房、食堂などの公共空間、そして信徒たちの暮らす二百余りの道房を備えていた。

創立者麥長天は一八四二年に三水県の貧しい家庭に生まれ、早くから工場や店の雑工として働き、商売に成功した。光緒年間に礼賢堂の創始者巫濟良の弟子、紀培道と出会い、先天道に入道、その後は佛山、広州、東莞、新会、香港等を行き来して、堂の設立に奔走した。光緒末年には、甥の麥泰開とともに南洋へ渡って布教活動を行った。一九一二年に帰国してから、私財と南洋華僑からの寄付を投じて飛霞洞の建設に着手した。一九二七年に再度南洋へ渡り、シンガポール、マラヤなどに齋堂を開いた後、一九三三年飛霞洞にて死去した。

一九二〇年代から三〇年代の最盛期、この飛霞洞仙館には男女合わせて数百人の信徒が共同生活を営んでいた。信徒は一定の費用を支払えば、仙館内に長期間居住することを許され、死ぬまで面倒を看てもらうことができた。死後は飛霞洞の裏の墓地に埋葬され、位牌は仙館内に設けられた位牌堂に祀られた。

飛霞洞では、信徒自ら畑を耕し、家畜を飼い、自給自足の生活を行っていた。戦争の激化によって南洋華僑からの寄付が途絶えた後は、洞内に紡織工場を設け、麻、綿布を生産し、それらを売って収入源としていた。<sup>8)</sup>

その他、飛霞洞では広州周辺から集められた若い男女を経生として養成し、組織的に法事サービスを請け負うことで収入を得ていた。<sup>9)</sup> また飛霞洞同人の出資による会社組織「桃源居合作社」を設立し、各界からの旅行団体を受け入れ、名所案内や食事（斎食）、宿泊のサービスを提供していた。<sup>10)</sup> こうした仙館運営のノウハ우는、東南アジア地域において斎堂を運営する際にも取りいれられていった。

## 二・先天道の香港、東南アジアへの展開

一八七〇年代以降、中国南部から東南アジアへの移民は、それまで移民先として首位だったアメリカを抜いて、飛躍的に増大した。それはアメリカにおける排華運動の高まりや、東南アジアにおける植民地都市の開発の進展、さらには汽船による苦力的大量輸送の始まりといった複数の要因によるものだった。一八七七年（光緒三年）になると、移民の目的地はイギリスがマレー半島に設けた海峡植民地が首位の座を占めるようになった〔可児一九七九：六四―六九〕。

清遠飛霞洞の創設者麥長天の南遊にもみられるとおり、嶺南道脈の信徒が香港や東南アジア各地に赴き、布教活動や募金を行うようになったのは、光緒末年以降のことである。その後東南アジア地域における華僑社会の発展に伴い、新しい堂が次々と開設された。海外に渡った信徒の中には女性も多く含まれていた。女性の海外移民は十九世紀にはまだ少数であったが、二十世紀に入ると少しずつ増加し、一

九二六年頃には、海峡植民地へ渡る女性渡航者の数が急激に増加した〔可児一九九三〕。この時期はちょうど、中国の生糸産業が競争力を失って衰退し、一九二九年の世界恐慌で壊滅的な打撃を受けた時期にあたる。それまで広東の製糸工場で働いていた単身女性たちの多くが、香港やシンガポールに出稼ぎに出るようになったのである〔Stockard:76-166〕。

その後、日中戦争期を経て、戦後から新中国成立に至るまで、波はあるものの、先天道の信徒たちは継続して東南アジア各地に渡った。とくに一九四九年から五〇年代にかけての時期、先天道は共産党政府によって反動的な「会道門」と見なされ、厳しい取締をうけたため、香港やマカオ、ベトナム、タイなどに逃れる信徒たちが相次いだ。

先天道の東南アジアにおける分布について、一九五六年に発行された先天道の雑誌によれば、「各地の現在活動している道院数は、港九（香港）に四十余か所、シンガポール、マレーシアに七十余か所、タイに六十余か所、インドネシア、ベトナムにそれぞれ十余か所、ミャンマー、モリリシャス、ブルボン島にそれぞれ数か所」と記されている。<sup>11)</sup>

香港では、最盛期の一六〇年代、七十か所の先天道の斎堂、道堂があり、最も早いものでは光緒三十一年（一九〇五）に創立されている〔游二〇〇五：七九―八三〕。香港の先天道は三教合一を掲げながらも、一九六七年に設立された香港道教聯合会の主要な構成会員となり、正統な道教の一派であることを標榜している。

マレーシアでは、十九世紀末のサラワクやペナンに先天道系の斎堂が出現していたといわれるが、それらの斎堂が先天道のどの分派に属する信徒たちによって設立されたものかはわかっていない〔蘇二〇〇七〕。一九三〇年代から四〇年代にかけては、広東省順德県や東莞県

出身の自梳女たちが、齋堂を設立する動きが相次いだ。マレーシアの首都、クアラルンプールには、一九六〇年代までに少なくとも十か所以上の齋堂が存在した〔蘇二〇〇四・二五〕。先天道嶺南道脈の系統で、現在も齋堂として機能しているところとして、クアラルンプールの飛霞精舎とイポーの金華精舎がある。いずれも清遠飛霞洞を創立した麥長天の甥、麥泰開によって創立された齋堂である。マレーシアには、嶺南道脈以外にも、帰根道、普度門、同善社など、他の分派に属する齋堂や仏堂が分布していたが、現在は一般の仏寺や廟になっているところが少なくない。

シンガポールも、一九三〇年代から四〇年代にかけて、多くの自梳女の出稼ぎ先となったところである。その多くは「阿媽」と呼ばれる住み込みの家政婦として働き、引退した後、老後の住まいとして選んだのが齋堂であった。シンガポールにはかつて、嶺南道脈、帰根道、普度門、同善社など複数の系統の齋堂があり、多くの女性たちが暮らしていた。イギリス人類学者マージョリー・トブレは、一九五〇年代にロンドン大学に提出した博士論文の中で、シンガポールの齋堂とそこで暮らす広東人女性たちの民族誌を描きだしている〔Topley1978〕。

嶺南道脈に属する齋堂の一つ、シンガポール飛霞精舎は、麥長天が南洋巡遊した際に創立され、その後甥の麥泰開が住持を務めたところである。麥泰開はやり手の商人で、香港やシンガポールに書局や齋食レストランなどを手広く経営していた。一九四九年以降、麥泰開は中国を脱出し、シンガポールに拠点を置いた。一九五〇年代には、シンガポールの広惠肇碧山亭公所が取り行う超度幽魂万縁勝会で法務股と齋務股正主を務め、飛霞精舎の齋姑を動員して、法会でふるまわれる精進料理の手配を一手に引き受けていた。

現在の飛霞精舎は旧館が老人ホームとなっており、四階建の新館には、神々を祀る祭殿や位牌を祀る祠堂、信徒の居住空間が設けられている。かつてここに住んでいた齋姑はほとんどが高齢のため亡くなったり、中国に帰国してしまい、現在はほとんどが空き部屋になっている。ベトナムには、これまでの調査で分かっているものだけでホーチミンの堤岸（チョロン）地区に八か所、ハノイに一か所ある〔游二〇〇九〕。そのうち、五か所が嶺南道脈の祖堂にあたる清遠飛霞古洞の流れを汲み、一か所が清遠飛霞洞系統、残りの二か所は「東初派」と呼ばれる、嶺南道脈とは別の先天道の一派の流れを汲んでいる。清遠飛霞洞の流れを汲む飛霞洞月庚堂は、一九二八年に麥泰開の母、岑昌珍によってチョロン地区に設立され、最盛期には四十人以上の齋姑が暮らしていた。ホーチミン市の先天道の多くは女性の経生団を擁し、死者の功德法事や盂蘭盆会といった伝統的な儀礼サービスを提供することによって収入を得ている。

さて、本稿がとりあげるタイは、香港やマレーシアと並んで、多くの会所が設立されたところである。一九七〇年代の最盛期、タイにおける先天道の会所数は百一十か所以上に及んだ〔林一九九六・一四四〕。タイ華人を構成するエスニックグループは、潮州系が圧倒的多数を占めているが、タイに設立された先天道の道堂、齋堂もやはり、ほとんどが潮州系の華人によって設立されている。そこで次節では、先天道嶺南道脈の潮汕地域からタイへの拡大過程をたどってみたい。

### 三．先天道嶺南道脈の潮汕地域への展開

陳昌賢が紫金県に設立した紫霞洞（別名三州堂）では、惠州、海陸豊地域、潮汕地域への「開化」（開拓、布教）が進められた。そのな

かで、とくに潮州地域の開化を任されたのは育潮堂の堂名を授けられた廖慎修であった。<sup>⑤</sup>廖慎修は紫金県の人で、壮年になってから陳昌賢に出会い、先天道に帰依した。

潮汕地域はもともと仏教信仰が盛んな地域であり、伝統的に寺院、庵、齋堂といった仏教施設が多いところである。筆者は二〇〇三年から二〇〇九年にかけて、潮汕地域を毎年訪れ、現地の寺廟や善堂を訪問したが、その折に何度か、髪を三つ編みにして後ろに垂らし、白い斎服をまとった齋姑の姿を見かけたことがある。彼女たちは長年にわたって肉食を絶ち、齋堂で半僧半俗の生活を送っている。あるとき偶然訪れた恵来縣溪西鎮の善堂では、大峰祖師が祀られている堂宇の裏に、先天道で最高神として崇める瑤池金母と、やはり先天道と関わり深い七聖娘娘の像が祀られているのを見かけた。その善堂には数人の齋姑が暮らしていた。表向きには大峰祖師を祀る善堂であっても、実際には齋堂として機能しているこうしたケースは、潮汕地域では決して珍しくない。

また潮汕地域には、珠江デルタ地域の「女仔屋」（いわゆる「娘宿」のこと）と同様、同じ村に住む未婚の少女たちが村の一軒家で共同生活をする風習があった。娘たちが暮らすこうした家は「姿娘仔間」と呼ばれた。「姿娘仔」とは潮汕地域の方言で未婚の若い女性を指す。少女たちはしばしばこの娘宿に集い、おしゃべりをしたり、刺繍などの手仕事をしたり、潮州の民謡を歌ったりして過ごした。「姿娘仔間」を切り盛りするのは寡婦や既婚の老婦人だった。潮汕地域の未婚女性たちの間に、珠江デルタ地域の「梳起不嫁」——結婚拒否を誓い合う——にあたる風習があったのかどうかは不明だが、彼女たちがそのまま結婚しなかったり、あるいは離婚や死別によって帰郷したりした場合に、女性たちが共同生活をして老後を送る家——珠江デルタ地域の自梳女の

間で流行した「姑婆屋」に相当するもの——が存在した可能性は十分考えられる。

二〇〇八年八月、筆者は中山大学の研究者とともに普寧県軍埠の明善觀という宗教施設を訪れた。明善觀は道教宮觀として登録され、主神として三清を祀っているが、女性主持の話によれば、以前は觀音を祀っていたという。現在七、八人の中高年の單身女性が住んでおり、すべて斎食の修行者であるということだった。また明善觀では数人の女の孤児をひきとって育てていた。

主持の話によれば、明善觀の前身は未婚の女性たちが暮らす「娘仔堂」（「姿娘仔間」と同じ娘宿の意）であり、後に齋堂になったという。明善觀の位置する何厝園は、何氏宗族が集住する単姓村である。何氏宗族の族人が彼らの所有する土地に明善觀を建て、同族の女性を最初の主持とした。それ以来、これまでの何代かの主持はすべて何氏出身の女性が務めた。明善觀で暮らす女性たちは農業や手工芸、養豚で生計をたて、節日には近所の家に呼ばれて読経し、報酬を得ていた。

筆者と同行者は、ちょうど明善觀にお参りに来ていた近所の老夫婦に話を聞くことができた。彼女の話によれば、解放前、明善觀の女性修行者は「姑太」と呼ばれていたという。彼女たちの何人かはシンガポールや香港に渡った。これらのインフォーマントの話や觀内の位牌堂に祀られている位牌などから推測するところ、解放前の明善觀は先天道のいづれかの分派に属する「坤堂」、すなわち女性修行者のための齋堂であった可能性が高い。

おそらく解放前の潮汕地域には、明善觀のような齋堂は少なかったであろう。先天道が潮汕地域に伝播し、根付いていく際、「姿娘仔間」や「姑婆屋」のような場所は、重要な拠点となったに違いない。このように、潮汕地域に伝播した先天道は、この地域のさまざまな



宗教伝統と融合しながら、根を下ろしていったと見られる。だが先天道の潮汕地域、さらにはタイへの展開については、これまで十分な資料がなく、ほとんど明らかにされてこなかった。二〇〇七年八月、筆者はタイの先天道を調査したとき、いくつかの重要な資料や情報を手にした。潮汕地域を開化し、さらに東南アジア各地を遊歴して、先天道のタイ進出の先駆けとなったのは、廖慎修の弟子の朱昌元（俗名存元、字復初、一八七八—一九一八）という人物である。本節では、タイで入手した『朱先師縁遊記宝卷』（一九六四）と江道泓編『泰国先天仙教伝玄集』（一九六〇）に掲載された「朱昌元先師伝略」（二六頁）に基づき、この朱昌元の事蹟を通して、潮汕地域からタイへの展開過程をたどることにしたい（以下に述べる朱昌元の事蹟はとくに明記しない限り、すべて『朱先師縁遊記宝卷』と「朱昌元先師伝略」からの引用である）<sup>18</sup>。

朱昌元は光緒戊寅年（一八七八）、潮州府惠来県龍溪都に生まれた。家は代々農家だった。四歳の時に母を喪い、七歳の時に父親が南洋に出稼ぎに行き、その一年後に客死した。孤児となった朱昌元は父方の伯母の家に身を寄せた。齋食を守る敬虔な仏教徒であった伯母の影響で朱昌元は先天道に入道し、廖慎修のもとに弟子入りした。

十三歳から師の廖慎修に随って嘉応州、潮州、惠州を遍歴した。紫金出身の客家である廖師は、客家語しか話せなかったため、潮州での布教活動には客家話と潮州語の両方を解する朱昌元が通訳を務めた。十八歳のとき廖師が亡くなり、二人の兄弟子とともに師の後を継ぐことを決意した。十九歳のとき、「天恩」の位を授けられ、兄弟子ともに惠潮嘉三州における善堂や齋堂の設立に尽力した。

一九〇一年の夏、揭陽県城内に逗留していた朱昌元は、ある文人の書齋に乩壇が設けられ、毎夜扶鸞が行われていることを人づてに聞いた。

た。ある晩、朱昌元は風水師を装って、乩壇の扶鸞儀礼にまぎれこんだ。扶鸞で降される乩文は因果応報や救済について語っていた。朱昌元は扶鸞儀式に参加している人々に尋ねた。「みなさんはいったい、この乩文の意味を理解しておられるのでしょうか？」。参加者たちは答えた。「いや知らない。ただ名利を求め、風水について尋ね、薬を処方してもらっているだけです。乩文の意味など深く考えたことはありません。先生、よかつたら解釈していただけますか。」朱昌元は乩文を受け取り、そこに隠された深い意味を朗々と演説してみせた。彼の演説に、その場にいた黄世昌、洪修仁ら十二人の参加者はみな一心に耳を傾けた。それからまもない八月十八日の子の刻、十二人は先天道に入道し、朱昌元とともに新しい堂を開くことを神に願い出た。覺善堂はこうして設立された。

翌年の一九〇二年三月、掲揚に疫病が流行した。県の役人ら掲陽の名士たちは、掲陽城内の城隍廟に参拝し、疫病が鎮まるように祈願した。当時城隍廟では扶鸞儀礼が行われており、次のような乩示が降った。「汝ら官紳商民はみな齋戒沐浴し、摩天石の紫雲洞でつっしんで朱善士に請い、大醮を建てよ。そうすれば、平安が得られるであろう。」朱善士とは朱昌元その人であり、摩天石の紫雲洞とは、朱昌元が普寧県の名山摩天石山麓に設立しようとしていた先天道の道場のことであった。朱昌元は知県の要請を受け、疫病を鎮める羅天大醮を開催した。醮を行ってから三日後、疫病はまたたくまに治まり、この快挙によって朱昌元の名声は高まった。入道者は日一日と増え、掲陽城内には習善堂、集善堂、達善堂、さらに女性だけの寶連堂が相次いで設立された。

一九〇三年（光緒二十九年）の年末、朱昌元は摩天石山麓の紫雲洞に赴き、ここで新しい年を迎えた。この年、朱昌元は普寧県の知県、鄧

桌堂を先天道に帰依させ、摩天石山での活動について、知県の支持を取り付けた。摩天石山には現在も、光緒二十九年十二月二十日付の告知文を刻んだ「普寧県主給示勒石碑記」が残されている〔林俊聡編二〇〇四・四〇二―四〇四〕。朱昌元の活動は、地方政府の役人たちからも強い支持を得ていたのである。

険しい摩天石山麓に紫雲洞を設立するには、多くの資金が必要であった。朱昌元はその費用を捻出するため、東南アジア各地を巡り、華僑からの寄付を集めることを決心した。一九〇四年二月十九日、朱昌元は摩天石山に別れを告げ、汕頭へ向かった。

#### 四・嶺南道脈のタイへの進出と展開

先天道嶺南道脈の潮汕地域からタイへの展開過程は、大まかに三つの時期に分けることができる。第一は清末から民国期にかけて、先天道が潮汕地域に拡大し、そこからタイに渡った信徒たちがバンコク周辺に先天道の道場を開いていく開拓期。第二は、戦後になってタイに渡った信徒たちを中心として、バンコク周辺だけでなく、地方にも多くの堂が設立されていく興隆期。第三は一九八〇年代以降の衰退期である。本節ではこの過程を、開拓期は引き続き朱昌元の事蹟を通して、また興隆期は、南洋先天道教總會を創立した江慧光（道号：道泓）の事蹟を通して、たどっていくことにしたい。

##### （一）開拓期

一九〇四年春、東南アジアを遊歴することを決心した朱昌元は、まず汕頭から汽船でクアラルンプールに渡った。クアラルンプールは父親が客死した地であり、父親の骨を探すことが目的だった。骨は結局見つからなかったが、朱昌元は華僑が葬られている義山の土をもちか

えた。その後列車でカンボン、ペナン、サラワク、クチン、西カリマンタンのボンティアナ、シンカワンと旅を重ねた。ボンティアナには富裕な華人の貿易商が多く、朱昌元はこの地に数カ月滞在し、多くの寄付を集めることができた。潮州人と客家人が多いシンカワンでは、故郷の言葉が通じることには懐かしさを覚えている。その後再びペナンにもどり、翌年の春にはペナンから六日間かけて当時はシャムと称していたタイのバンコクへ渡った。バンコクで、朱昌元は壮麗な仏教寺院に目を見張り、僧侶に進んで喜捨する人々の姿に感動している。シャム国滞在中、朱昌元は現地の華僑から多くの援助を受け、約二年間の外遊を終えて帰国した。その後すぐに紫雲洞の建設に着手し、一九〇八年秋、堂宇は完成した。

タイへの進出にあたっては、朱昌元の弟子、魏昌善（俗名集善）の奔走によるところが大きい。魏昌善は掲陽県魚湖都梅兜郷の人で、二十七歳のとき突然病魔に襲われ、夢枕に立った仏に広く善事を行えと教えられた。病が癒えた後、魏昌善は志を新たに、先天道に入道した。民国元年、魏昌善はバンコクに渡り、バンコク在住華僑の助けを借りて復陽善堂を設立した<sup>19</sup>。復陽善堂は、先天道嶺南道脈がタイに設立した最初の堂社である。一九一四年、魏昌善らの提案で、朱昌元は再びシャム国に渡り、悪疫退散のための羅天大醮を四十九日間にわたって執り行った。帰国後はずっと紫雲洞に籠もり、一九一八年に亡くなった。

復陽善堂の創立者魏昌善は民国十四年に五十一歳で亡くなった。その後は、彼の娘と弟子たちが道務を継承し、バンコク郊外や地方に新たな善堂を設立していった。

##### （二）興隆期

次に、一九五〇年代から七〇年代の興隆期についてみていきたい。

この時期、先天道のタイ布教において指導的な役割を果たしたのは、潮州府普寧県出身の江慧光（道号道泓、一九三二—一九八四）だった。<sup>20</sup> 江慧光は広東省普寧県上塘郷に生まれた。父親は慧光が生まれるとまもなくシヤム国へ出稼ぎに行き、音信不通となった。残された母親と祖母は紡織で生計を立て、慧光を育てた。

一九四三年、潮汕地域一帯が大飢饉に見舞われ、大量の餓死者が発生した。この世の無常を悟った慧光は、普寧県華溪郷「明德堂」の女性信徒陳永鴻と出会い、先天道に入道した。

一九四六年、二十四歳の時、証恩の位に昇格した。翌年陳永鴻の推挙により、タイ布教を命じられた。六月十五日に出航し、安南、サイゴンを経て、二十四日にタイに到着し、陳永鴻が創立した明德善堂に身を寄せた。

一九四九年、カンボジアのプノンペンで行った醮が成功裏に終わり、中国に帰国した。慧光は、このまま祖国に残りたいという思いを捨てきれなかったが、友人たちに共產政権下では今後どうなるかわからないと諭され、タイにもどることを決意した。

一九五〇年の春、中部のラヨーン市を訪れた慧光は、土地が広大で交通の便がよく、人口も多いこの地を気に入り、ここに善堂を建設することを決心した。プノンペンで得た醮会の報酬や布施をつぎ込み、三ヵ月後、堂は竣工した。これが現在まで続く三一善堂である。一九五五年の秋には、明德善堂の品壇に呂祖が降壇し、東勢に奇縁ありと示されたことをきっかけとして、チャンタブリーに三光善堂を設立した。この頃から信徒たちによる新しい堂社の設立が相次ぎ、先天道の善堂や斎堂は、バンコクとその周辺だけでなく、北部や南部にも拡大していった。

一九五九年夏、慧光は保恩の位に推挙され、嶺南道脈の事実上の最

高指導者であった曾道洸教主（俗名漢南、一八九七—一九六七）<sup>21</sup>の承認を得た。またこの年、『先天道伝玄集』の編纂に着手し、タイの僧王と中華民国駐タイ大使、華人の各会館から贈られた祝賀文を掲載した。江慧光は日頃からバンコクの仏教寺院の僧侶や華人社団のリーダーと積極的に交流し、自らも普寧県と同郷会の理事を務めていた。

この年の冬、曾道洸教主からの要請を受け、慧光は香港に赴いた。空港では曾道洸を始めとする信徒たちの盛大な歓迎を受けた。先天道の総会（別名万全堂）はずっと重慶に置かれていたが、中国大陸における先天道への取締が厳しくなったため、一九五二年香港に移され、曾道洸が会長を務めていた。当時、曾道洸は自分の後継者として慧光に期待をかけるとともに、慧光が香港先天道総会を拠点として活動することを望んでいた。だが慧光は、あくまでもタイを拠点として活動していきたいと考えていたため、曾道洸の頼みを断った。

一九六二年、慧光はペナンの同善堂の女性堂主の黄姑太からの要請を受け、醮会を手伝うため、マレーシアへ赴いた。黄姑太は広東省大埔県出身で、ペナン地区の斎堂の指導的な役割を果たしていた。醮が終わると、江慧光は彼女の案内でマレーシア各地の堂を巡った。まずイポーから、キャメロン、クアラルンプール、セレンバン、マラッカを経て、シンガポールへと至り、各地の堂で発恩の儀礼を執り行った。このとき天恩の位を授かった信徒は四十人以上に上った。

一九六三年春、慧光は、タイに南洋地域の先天道を統括する総堂を建設することを決心した。そこで再びマレーシアやシンガポールの先天道の堂社を巡り、寄付を募った。十二月、タイの建築様式を取り入れた南洋先天仏教総会の建物が完成し、総会の開幕式典が開催された。式典には、タイ宗教庁長、中華民国駐タイ大使が出席し、タイの紅卍字会や華人の同郷団体からも祝辞が寄せられた。先天道では伝統

的に儒仏道の三教合一を説くが、タイの先天道はホスト国であるタイの国教を意識し、その宗教政策に従ってきた。「先天仏教」という名称を名乗ることによって、タイの先天道は初めて仏教を標榜する団体であることを対外的に表明したことになる。

新たに作られた南洋先天仏教總會の規定には、一生齋食を行う天恩以上の信徒を指す「佈道会員」と天恩以下の一般信徒としての「修道会員」以外に、齋食を行わなくてもよく、結婚してもよいとする「護道会員」というカテゴリーを設けた<sup>③</sup>。こうした新しい会員制度の導入は、先天道が齋食や禁欲主義を旨としつつも、タイの若い世代の信徒を増やすためにとった適応戦略の一つであったと考えられる。

一九六六年、慧光は十地の位に昇格し、道号を道泓と改めた。翌年曾道洸教主が香港で亡くなると、江道泓はその後を継ぎ、教主（家長）に就任した。その後しばらく江道泓はタイと香港を行き来して道務に邁進したが、一九七九年、先天道の總會（万全堂）をバンコクの南洋先天仏教總會に移した。

### （三）衰退期

一九八四年六月六日、江道泓は香港で死去し、香港とタイの弟子たちによって盛大な葬儀が催された。江道泓が亡くなった後、タイの先天道内部では後継者をめぐって内部分裂が起き、教主の不在が続いた。また八〇年代以降は新しい入道者が激減し、活動は縮小した。高齢の信徒たちが亡くなると、善堂や齋堂の中には閉鎖されたり、売却されたりするところも出てきた。一九九四年にタイの先天道を訪問した台湾の研究者林万伝氏の報告によれば、南洋先天仏教總會開幕時の記念冊子に掲載された百十六か所の堂社のうち、三十二か所が既に消滅しているという。また一貫道の仏堂になってしまったところもある

〔林一九九六：一四四—一四五〕。

林万伝氏は、タイにおける先天道の衰退を、「新しい血を入れることができなかったために生じた老化現象」と表現している〔林一九九六：一四五〕。では、タイの先天道はなぜ新しい信徒を獲得できなかったのだろうか。外的要因としては、一九六〇年代以降、中国からの新しい移民の波が途絶え、通婚や国家の政策により、タイ華僑のホスト社会への同化が進んだこと、また九〇年代までに順調に経済成長を遂げ、比較的安定した社会体制が持続したタイでは、社会的弱者のアジールとしての齋堂の機能は、もはや必要とされなくなったということも考えられる。

だが、華僑の同化が進んだにもかかわらず、戦後潮汕地域から伝播した徳教が、今日に至るまでタイの華人を中心に教勢を拡大し続けてきた点を考えると〔吉原一九九九〕、先天道内部の要因のほうが大きく作用していたと見るべきだろう。すなわち先天道の救済論や喫斎や内丹修養、禁欲主義を貫く厳格な修行、そして信徒が半出家状態で共同生活を送る齋堂というシステムそのものが、現代タイ社会に生きる華人の二世、三世の若者たちには受け入れがたいもの、魅力の乏しいものになってしまったということである。一九六三年に設立された南洋先天仏教總會の会則では、できるだけ幅広い層から信者を獲得していくために、齋食や禁欲主義を課さない「護道会員」というカテゴリーが設けられたが、タイ仏教を身近なものとして育った若い世代には、ほとんど効力がなかったと言えよう。

若い信徒の入信が減ることは、どのような宗教結社においても打撃だが、先天道の場合はとりわけ致命的であった。

朱昌元や江慧光の事蹟が示すとおり、先天道における高位の信徒は、①寄付を募る、②布教を行う、③発恩儀礼を行う、④法会を行う、ことを目的として県や省、あるいは国を越えた移動を頻繁に行った。



だが、そうした頻繁な移動は、信徒が高齢化するとむしろ少くなる。七〇年代まで、香港、マレーシア、タイ、ベトナムの先天道は盛んに交流していたが、信徒が高齢化した八〇年代に入ると行き来が減り、現在はすっかり途絶えてしまった。

さらに、先述したように、先天道では、高位の位を持つ信徒を師として入道し、昇格の許可を得るという位階制度をとっているために、そうした権限を持つ信徒が病気になるって動けなくなったり、亡くなったりしてしまうと、一般信徒は昇格できなくなってしまう。天恩の位を得ないと、弟子をとることはできないので、発恩儀礼が行われなくなると天恩の位を持つ信徒の数が減り、それに伴って入道者も減るといふ悪循環が生じる。八〇年代以降の急速な衰退は、こうした悪循環が招いた帰結であった。

## 五. タイにおける先天道の現状

二〇〇七年七月三一日から八月五日にかけて、筆者は香港中文大学宗教学系の游子安教授の一行とともに、タイの華人宗教結社の調査を行った。筆者にとつてタイでの調査は初めてであり、しかも短期間だったので、きわめて初歩的な報告に過ぎないが、そのとき見学したいくつかの先天道の堂の現状を紹介したい。

八月一日、筆者らは最初にバンコクの南洋先天仏教總會を訪ねた。屋根の反った中国式建築様式と天井の高いタイ風の建築様式が入り混じった独特の建物である。内部には巨大な金色の弥勒仏が祀られている。この日はちょうど観音誕の日だったため、多くの信徒たちが集まり、供物を並べたり、線香を上げたりする光景が見られた。この日はまた、九十五歳になる女性信徒の誕生日だった。「蔡姑太」と呼ばれる

表2 タイ国内における先天道の堂93か所の分布

地方区分	県 名 (地区名)	数	地方区部	県 名	数
中部	バンコク市内	44	東部	チャチェンサオ	4
	サムップラカーン	1		チョンブリー	2
	サムットサーコーン	3		チャンタブリー	1
	ノンタブリー	1		ラヨー	1
	カンチャナブリー	4	東北部	ウボンラーチャターニー	1
	スパンブリー	1		コーンケー	1
	プラチュワップキーリーカン	3	南部	スラターニー	1
	ナコーンパトム	3		ソンクラ	2
	ラーチャブリー	2	北部	ナコーンサワン	1
	ペッチャブリー	1		ペッチャブーン	1
	アユタヤ	2		チェンマイ	1
	サラブリー	6		ピッサヌローク	4
				ピチット	2

「各処道場通訳堂景」「南洋先天仏教總會開幕記念暨各処道場通訳録」(1966)より作成。写真が掲載されたものは93ヶ所。この他、地名が付されていないものを含めると、116ヶ所の堂名が掲載されている。

この女性信徒は、普寧人の両親のもとにタイで生まれた。四十五歳の時、陳永鴻を開示師として明徳善堂で入道したという。

次の日はタイ中部のチョンブリー県の郊外に位置する万玄仏堂を訪ねた。ここで、タイの先天道の信徒たちの中では最高位の道字輩の道号を持ち、「太爺」の称号で呼ばれる呉道深氏と会うことができた。呉道深氏は民国三十一年、掲西出身の両親のもとにタイで生まれた。両親を早く亡くし、満足に学校に行くこともできなかったが、仏教に対する信仰は堅く、一九五七年、バンコクの通玄善堂で入道した。万玄仏堂は中国風の二階建ての寺廟建築で、一九六四年に呉氏自ら信徒とともに建てたものである。仏堂内には小さな部屋がいくつもあり、かつては多くの信徒たちが暮らしていた。けれどもそれらの信徒たちが亡くなると、新しく入ってくる信徒たちもないまま、現在はほとんどすべて空き部屋となっている。現在、発恩の儀礼を行うのは呉氏の役目だが、近年は病気がちのため遠出ができず、ほとんど行っていないということだった。

八月四日は、チョンブリー県の隣、ラヨーン県の農村に位置する三一善堂を訪ねた。三一善堂は、先述したように、江道泓（慧光）がタイに創立した最初の善堂である。ここでは現在、数人の高齢の信徒と手伝いの家族が暮らしている。

八月四日の夜、チョンブリー県に再びもどり、江道泓が晩年を過ごした泓恩堂に立ち寄った。ここでは二人の斎姑が我々を出迎えてくれたが、二人とも高齢のため足が弱くなり、杖をついて歩いていた。

現在タイの先天道において、高齢の信徒たちの面倒を見、仏堂間の連絡係を担っているのは、親に捨てられたり、両親を亡くしたりしたために、先天道の堂にひきとられ、養育された養女たちである。彼女たちの多くは華人ではないが、信徒たちと家族のように暮らしてきた

ために、潮州語や北京語を話すことができる。潮州語とタイ語しか解さない呉道深氏の話を通訳してくれたのも、また我々が移動する際の運転手役を務めてくれたのも、養女として育てられた女性たちだった。南洋先天仏教総会で開かれた観音誕の食事作りなどでも、こうした女性たちが活躍していた。だが彼女たちは、中国語は話せても、読んだり書いたりすることはあまり得意ではない。宗教教義や儀礼知識をすべて中国語で伝承してきた先天道を、彼女たちがそのまま継承していくことはおそらく不可能であろうと思われる。

### おわりに

新しい入道者の減少と信徒の高齢化による衰退は、タイだけでなく、香港やマレーシア、シンガポールの先天道にも共通した現象である。多くの斎堂は、養女として育てられた女性信徒が堂守として残るのみで、事実上の活動停止状態に陥っている。かつては盛んであった堂と堂、師と弟子たちの地域を越えた交流も、現在ではほとんど途絶えてしまっている。

ただ例外として、一九八〇年代以降中国大陆において、かつての信徒たちが再び集まり、新しい堂をつくるための費用を集めるといった、新しい動きが起こっているようである。一九九四年にタイの先天道を訪ねた林万伝氏は、広東省恵来県葵潭出身の女性信徒の話として、解放前七か所の堂があった葵潭で、改革開放後活動が徐々に復活しており、既に百名以上の信徒がいると記している「林一九九六・一四八」。タイの万玄仏堂の呉道深氏は、二〇〇七年八月に筆者らが行ったインタビューの中で、二十年ほど前に、葵潭の信徒たちが、「領恩」、すなわち師から位を授かるためにわざわざタイまでやってきた

と話していた。また昨年筆者が香港の信徒から聞いた話では、葵潭では玉虚観など複数の堂がすでに復興しており、八十歳を越えたタイ華僑の「太爺」が暮らしているという。

九十年代初頭には既に、普寧県摩天石山の紫雲洞を復興しようという機運が高まり、潮普恵復建摩天石古庵理事会が発足して、山門の整備や廟宇の修復が進められた。この摩天石古庵理事会の構成メンバーがどのような人々であったか、その詳細は不明だが、寄付者の名前を刻んだ芳名榜の中には、香港やタイの先天道の堂名がかなりの数刻まれており、おそらく先天道の関係者がいたと推測される。二〇〇九年十月一日、筆者はこの芳名榜の中に偶然見つけた甲子鎮濟善堂の名前をタクシーの運転手に告げ、運転手に探して当ててもらった。

恵来県に隣接した陸豊県甲子鎮も、かつて先天道の堂が多く分布していたところである。濟善堂という扁額が掲げられた小さな堂宇の正面には、元始天尊、釈迦如来、孔子という三教の聖人が祀られ、隣接した建物には、斎姑の遺影や肖像画が飾られていた。応対してくれた女性信徒（七十四歳）の話によれば、近隣の信徒の数は五百名以上に上り、葵潭の「太爺」を呼んで、発恩の儀礼を何度か行っている。また来年は隣に新しい堂を建設すべく、寄付を募っているという。この女性信徒は、両親が先天道の信徒であったため、子供の頃から齋食を続けてきたが、結婚して子供がいるため、堂主にはなれない。そのため、新しく創立する堂は、若く結婚していない信徒に引き継いでもらうつもりだと話していた。

本稿では、東南アジア各地に伝播した先天道の歴史と現状について、初步的な報告と考察を行うだけにとどまったが、今後は、発祥地の広東と東南アジア各地での調査・研究をさらに進め、それぞれの地域における発展から衰退への過程、そしてその背景を比較検討してい

きたいと考えている。さらに、一貫道や徳教など他の華人宗教との比較研究を進め、東アジアと東南アジアの近代を背景として発展した先天道とはいったい何であったのかを、改めて考えてみたい。

## 註

- (1) 羅教の教義及び青蓮教の歴史的展開については、「浅井一九九〇」を参照されたい。
- (2) 肉食を絶つこと。正式に入道した信徒は、修行の一つとして「長齋」すなわち、生涯肉食を絶たなければならない。
- (3) 曾道洸「藏霞古洞源流紀略」『大道』（香港先天道会）第二期、一九五七、三三—三三頁。
- (4) 「藏霞古洞誌序」朱汝珍他編『藏霞集』巻一、一九一五、三八頁。
- (5) 曾道洸「陳昌賢先生伝略」『大道』第二期、一九五七年、二九頁、宇文「紫霞洞概述」『大道』創刊号、一九五六年、二七頁。
- (6) 先天道の位階制度については、「Topley 1963: 374」、浅井一九九〇・四一六—四一七、洪正心居士「先天道道教回顧與前瞻」『大道』第二期（一九五七）、六頁の他、筆者が香港の先天道の齋堂で行ったインタビューの内容に基づく。
- (7) 張開文「故主持麥長天先生行述」『飛霞洞志』上集、巻二、廣州・粵華興隆記印務局、一九三二年、二七—三七頁、三水県地方志編纂委員会編『三水県志』広東人民出版社、一九九五年、一三三—一三六頁。
- (8) 清遠県旅遊局では信者への聞き取り調査をもとに、当時の信徒たちの生活状況について、かつて使われていた家具、器物、扁額などとともに、洞内で展示している。
- (9) 『飛霞洞経生会自治修養規章』（出版地、出版者不明一九三六）、

及び二〇〇九年十二月二十五日に行ったクアラルンプール飛霞精舎の張從月（道号昌勝）姑婆へのインタビュに基づく。

(10) 何廷璋編『飛霞洞二十二周年孔聖誕紀念特刊』廣州・粵華興印務局、一九三五年、二七—二八頁。

(11) 著者不明『先天道近況及其分布』『大道』第一期、一九五六年、一一頁。

(12) シンガポール飛霞精舎の女性信徒たちへのインタビュ（二〇〇九年十二月二十七日訪問）、及び飛霞精舎で刊行された善書、経書類に掲載された広告に基づく。

(13) 「広惠肇碧山亭一九五二年第四届万縁勝会」  
([http://www.kwspecksantheng.com/Activity/Wanyuan\\_4.htm](http://www.kwspecksantheng.com/Activity/Wanyuan_4.htm))。

このホームページの存在については、游子安博士からご指摘を受けた。ここに記して感謝の意を表する。

(14) 二〇〇八年十二月二十日—二十五日、二〇一〇年八月二十三日—二十四日、筆者はホーチミン市の先天道についての予備的な調査を行った。

(15) [Skinner1957: 212] によれば、一九五五年の時点で潮州系華人はタイ華人全体の五十六%を占めている。

(16) 羅公度「廖慎修伝」李寅初編『紫霞洞集』中集、一九三七年、九頁。

(17) 方礼毫「潮汕鄉村〈婆娘仔間〉」『潮汕風情網』  
(<http://www.csfgw.com/html/404/200711121608051126.html>)。

(18) 『朱先師縁遊記玉卷』は、生前朱昌元が書き残し、バンコクの復陽善堂に保管されていた手記を、バンコク郊外バーンブアトーンの通玄善堂の信徒たちが改めて編纂し、印刷したものである。

(19) 魏昌善の事蹟については、『泰国先天仏教伝玄集』（バンコク・

香港書報印刷有限公司、一九六〇年）に掲載された江慧光「魏昌善先師伝略」（三〇頁）、及び頼静岩「復陽善堂史略」（八二頁）を参照した。

(20) 江慧光の事蹟については以下の資料を参照した。江慧光の編纂による『泰国先天仏教伝玄集』、『南洋先天仏教總會開幕紀念暨各処道場通訊録』（バンコク・上海印務局、一九六六年）、南洋先天仏教總會編『教主江道泓之風範』（一九八一年、出版者、印刷者不明）、死後、遺された弟子たちによって編纂された『教主江道泓老太師栄哀録』（一九八五年、出版者、印刷者不明）。

(21) 陳永鴻は普寧県華溪郷の富裕な商人の家に生まれ何不自由なく育ったが、十八歳の時修行を志し、先天道に帰依した。一九一三年、二十八歳のときに天恩の位に昇格し、一九二三年澄海県樟林郷に成徳仏堂を設立した。その後福建、シンガポールで布教活動を行った後、タイに渡り、バンコクに明徳善堂を設立した。第二次世界大戦後はタイに移住し、明徳善堂を切り盛りするとともに、江慧光を支えて南洋先天仏教總會の設立に尽力した。一九七〇年没、享年八十五歳。以上の内容は、陳永鴻の死後、弟子たちによって編纂された『永鴻姑太栄哀録』（バンコク・南洋先天仏教總會、一九七〇年）に基づく。

(22) 梅県出身の客家。梅南の和風坪道院で入道した後天恩の位を授かった。一九三〇年代には梅州市にある梅江大橋の建設のための資金調達に奔走し、南洋華僑から多くの寄付を集める。一九四〇年代初頭には、梅州市の呂帝廟に附属する広済善堂の運営に携わった。一九四三年に先天道重慶総会長となったが、一九四九年以降、大陸での活動が困難となったため、總會を香港に遷し、教主に就任した。一九五四年には東南アジア各国を歴訪し、各地の



信徒と交流を深めた。一九六七年、香港にて死去。以上、曾道洸の事蹟については著者不明「曾漢南道長事蹟」『大道』創刊号、一九五六年、七―十、二〇頁を参照した。

(23) 「南洋先天仏教總會規程」『南洋先天仏教總會開幕紀念暨各処道場通訊録』所収、一五三―一五八頁。

(24) 現在の建物は一九七九年に改築されたものである。

## 参考文献

- 浅井紀 一九九〇『明清時代民間宗教結社の研究』研文出版  
 浅井紀 二〇〇五「無生老母への誘い」野口鐵郎編『結社が描く中国近現代』山川出版社  
 可児弘明 一九七九『近代中国の苦力と「猪花」』岩波書店  
 可児弘明 一九九三「香港移民資料統計（東南アジア・インド洋方面関係）」『CASニュースレター』慶応義塾大学地域研究センター  
 志賀市子 一九九九『近代中国のシャーマニズムと道教―香港の道壇と扶乩信仰』勉誠出版  
 志賀市子 二〇〇二「先天道嶺南道派の展開―その理念と担い手を中心に」『東方宗教』第九九号  
 野口鐵郎 一九八三「東南アジアに流伝した二つの中国人宗教」酒井忠夫編『東南アジアの華人文化と文化摩擦』巖南堂書店  
 吉原和男 一九九九「タイへ伝えられた徳教とその変容」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社  
 吉原和男 二〇〇五「華人宗教の国際的ネットワーク―徳教の事例」住原則也編『グローバル化のなかの宗教』世界思想社  
 曹玄思 一九九四「先天的自梳女」馬建劍他主編『華南婚姻制度与婦女地位』廣西民族出版社。

林万伝 一九九六「泰国先天道源流暨訪問記実」『民間宗教』第二輯  
 林俊聰編著 二〇〇四『潮汕庵寺』上冊、広州：花城出版社  
 蘇慶華 二〇〇七「檳城的先天道支派・帰根道初探」（香港中文大学道教文化研究中心主催「先天道歴史と現況研討会」発表原稿）  
 蘇慶華 二〇〇四「馬新華人研究・蘇慶華論文集」クアラルンプール：マレーシア創価学会

游子安 二〇〇五「香港先天道百年歴史概述」『香港及華南道教研究』香港：中華書局

游子安 二〇〇九「二十世紀從嶺南到越南先天道の傳承與変遷」学習院大学主催「越境する近代東アジアの民衆宗教―移動・交流・変容」シンポジウム発表原稿、二〇〇九年十月十七日

Sankar, Andrea Patrice. 1978. *The Evolution of the Sisterhood in Traditional Chinese Society: From Village Girls' Houses to Chai Tang in Hong Kong*. Dissertation. The University of the Michigan.

Skinner, G. W. 1957. *Chinese Society in Thailand. An analytical History*. Cornell University Press.

Topley, Marjorie. 1963. "The Great Way of Former Heaven: A Group of Chinese Secret Religious Sects." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 26-2.

Topley, Marjorie. 1975. "Marriage Resistance in Rural Guangdong", in M. Wolf and R. Witke, eds., *Women in Chinese Society*, Stanford: Stanford University Press.

Topley, Marjorie. 1978. *The Organisation and Social function of Chinese Women's Chai Tang in Singapore*. [microform], London: Photographic Section, University of London.

The rise and development of Xiantian dao (The Great Way of Former Heaven)  
in modern Guangdong and Southeast Asia:  
Focusing on its diffusion and adaptation from Chaozhou to Thailand

Ichiko Shiga

Xiantian dao is a successor to the Chinese popular religious sect of Wuwei jindan dao founded in Jiangxi during the reign of Yongzheng (1722-1736), whose origin can be traced to the Luojiang formed in Ming dynasty. In the late nineteenth century, Xiantian dao spread into Qingyuan county, northern Guangdong in 1860, and its tradition called the Lingnan subsect greatly flourished in Guangdong from the reign of Guangxu till the 1930s. From Guangdong, it spread southwards to Hong Kong and Southeast Asia countries. This article aims to investigate not only the rise and development of the Lingnan subsect, but also the background of its diffusion and adaptation in Guangdong and Southeast Asia, focusing on Xiantianado's ranking system, masters' leaderships, transnational networking among disciples and social functions of vegetarian halls for women. In this article, I particularly wish to focus attention on the process of diffusion from Chaozhou area to Thailand in a century, dividing it into three periods, that is the pioneering stage, the prosperous days and the decline period. Finally I also investigate the reasons of declination of Xiantian dao in Thailand since 1980.

志  
賀  
市  
子